

# シンポジウム「日本と東アジアの〈仏伝文学〉と天竺世界」

小 峯 和 明

本シンポジウムは、二〇二二（二〇二一）四年度・科学研究費基盤研究（B）「19世紀以前の日本と東アジアの〈仏伝文学〉をめぐる総合的比較研究」（課題番号24320051 代表・小峯和明）のまとめとして、立教大学日本学研究所主催、立教大学文学部文学科日本文学専修・立教大学日本文学会共催の形で、二〇二四年七月二十六日に立教大学で開催された。三人の基調講演、第一セッション「中国」、第二セッション「韓国」、第三セッション「ベトナム、日本」という構成で、研究対象にあわせて発表メンバー及びコメンテーターも中国、台湾、韓国、ベトナムからの招待者も交えた文字通り東アジアに及ぶ刺激的なシンポジウムとなった。

〈仏伝文学〉とは、私に定義つけたもので、釈迦の生涯の伝記や説話、物語にとどまらず、釈迦の前世の説話である本生譚（ジャータカ）をはじめ、阿難や目連などの仏弟子譚、涅槃後の舍利譚、さらにはその背景をかたどる天竺神話や天竺譚の数々をもひろく対象にする概念である。日本では古代を中心に研究の蓄積があるが、中世から近世、近現代に至るまで通時代に再生産され続けているにもかかわらず、一部の個別研究にとどまり、その全体を包括的、体系的にとらえる研究はほとんど見られない。本シンポジウムは、これをさらに漢字漢文文化の共有圏にある中国、朝鮮半島及びベトナムまで視野に入れてとらえ、あわせて文字文芸のみならず、絵画や造形なども交えたメディア・ミックスの視座から多面的、多角的に検証しようとしたものである。

基調講演では、特に日本の近世及び近代の〈仏伝文学〉へのひろがり  
の提言、サンスクリット原典と漢訳仏典をめぐる翻訳の位相、〈仏伝文学〉

と東アジアのキリシタン文学との関連などに問題がひろがった。

第一セッションの中国に関しては、唐の『釈迦如来成道記』と明の『釈氏源流』とが焦点になり、北京を中心とする東アジア古典研究会で『釈氏源流』を輪読しているメンバーを主とする報告が基調となった。第二セッションの韓国の場合は、高麗時代と朝鮮時代にそれぞれあらたな仏伝文学〉が作られ、漢訳仏典や説話集、朝鮮文学などとの関連が問題となった。第三セッションのベトナムに関しては、ベトナム古典の代表ともいえる『嶺南摭怪』にみる神話的な話題を例にしたり、あらたに発見された『釈迦如来応現図』の刊本の報告がなされた。日本については、『釈迦の本地』や幸若舞曲と仏伝とのかかわり、近世、近代の仏伝にまでひろがる問題群が展開された。

各研究発表に対して、コメンテーターが付き、個々の問題をさらに対象化し、あらたな面にひろげていく役割をはたし、今後の展望が拓かれたといえる。

本シンポジウムをもとに、科研の成果として、他のメンバーをも交えて勉強出版から同題の論文集を公刊する予定である。

なお、本科研の分担者であり、第二セッションのコメンテーターを予定していた増尾伸一郎氏がシンポジウムの前日に急逝され、その知らせが劈頭にもたらされ、会場は愁嘆の場ともなった。謹んで哀悼の意を表したいと思う。

シンポジウム開催にあたって、立教大学日本学研究所関連の先生方や院生達にお世話になった。御礼申し上げます。  
（本学名誉教授）